

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 14 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885028

研究課題名(和文)「リスク下にある子ども/若者」に対する教育支援・自立支援の事例研究

研究課題名(英文) A Case Study on Educational Support for "At-risk" Children and Youth

研究代表者

伊藤 秀樹 (ITO, HIDEKI)

東京大学・教育学研究科(研究院)・助教

研究者番号：80712075

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、社会的排除のリスク下にある子ども/若者を多く受け入れている高等専修学校を事例とし、生徒たちにどのような教育支援・自立支援が行われるのか、その支援は卒業生の社会的自立のプロセスとどのように関連するのか、という2点を描き出すことを目的とした。事例の高等専修学校では、在学時の教師の話の内容や教師・友人との心理的な絆が、卒業生の就業・就学継続を促す「想起される学校経験」となっていた。しかし卒業生のインタビューからは、そうした「想起される学校経験」が早期離職・中退者の社会的自立の困難にもつながりうることを示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to show the influences of teachers' educational support in lower track upper secondary schools on continuing jobs or schools among these schools' graduates. I investigated these mechanisms through a case study of a certain upper secondary specialized training school (Y school).

Three graduates of Y school mentions that they overcome their difficulties about continuing their jobs or schools by remembering their experiences of Y schools, such as teachers' guidance, hard trainings during club activities, and close relationships with teachers or classmates. However, teachers of Y school faced dilemma that remembered school experiences which assist graduates to continue their jobs and schools may depress graduates who quit jobs and schools early and make their reemployment difficult.

研究分野：教育社会学

キーワード：教育社会学 教育支援 自立支援 進路形成 高等専修学校

## 1. 研究開始当初の背景

中学校卒業者の98%以上が後期中等教育へと進学する現在の日本では、高卒資格を取得しないことがその後の進路形成にとって大きなハンディとなり、社会的排除の契機となる(阿部2007、西田2008など)。そうしたなかで、定時制高校・通信制高校・高等専修学校・サポート校などの非主流の後期中等教育機関が、不登校・高校中退・学業不振・非行傾向・発達障害などの背景をもち全日制高校への進学が難しい子どもたち、つまり社会的排除のリスク下にある子どもたちを受け入れ、社会的自立に向けた支援を行う役割を担ってきた。

欧米圏では、学業での困難や家庭の社会経済的困難を経験し、学業不振や中退(dropout)のリスクを抱える若者を“*At-risk students*”(リスク下にある生徒)という言葉で把握してきた(Croninger and Lee 2001)。そして、彼ら/彼女らに対して行われるオルタナティブなプログラム(ex. 学校内の職業教育、オルタナティブな high school)に焦点を当て、それらが生徒たちの社会的自立に向けて果たす機能を積極的に評価する研究が進められてきた(Kerka 2003)。

一方で、「リスクを抱える子ども/若者」への教育支援・自立支援を対象とした日本の先行研究には、以下の2つの問題が存在する。第一に、非主流の後期中等教育機関が「リスク下にある子ども」にとって後期中等教育上の最後のセーフティネットとなってきたにもかかわらず、「教育から職業への移行」を捉える研究群ではその存在が看過されてきた。ただし、同様に「リスク下にある子ども/若者」を受け入れる性質をもつ下位ランクの全日制高校については、「教育から職業への移行」に関する一定の研究蓄積がなされてきた。しかしこれらの研究では、教育社会学におけるトラッキング理論を背景として、生徒たちの社会的自立の困難性とそのメカニズムに強く焦点が当てられてきた(荻谷ほか1997、シム2009、荒川2009など)。そのため第二に、学校の教育支援・自立支援が「リスク下にある子ども/若者」の社会的自立に果たす「順機能」については、十分に検討されてこなかった。

「リスク下にある子ども/若者」を社会的包摂へと導くために、現在の教育の場でいかなる教育支援・自立支援が必要なのかを明らかにすることは、重要な政策的課題である。その際、下位ランクの全日制高校にすら進学が難しい「リスク下にある子ども/若者」を受け入れる場である、非主流の後期中等教育機関にこそ、焦点が当てられるべきだろう。また、トラッキングの影響による社会的自立の困難性を研究の前提とせず、「リスク下にある子ども/若者」に対する教育支援・自立支援の現状を順機能/逆機能の双方に目配りしながら理論化することも、重要な理論的

課題であるといえる。以上の課題のもとで、非主流の後期中等教育機関を対象に、教育支援・自立支援のあり方と卒業生の社会的自立の達成/困難の関連をより中立的な立場で描き出していくことは、より「適切」で重要な作業であると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究では、ある高等専修学校(以下、Y校)を事例とし、生徒たちにどのような教育支援・自立支援が行われるのか、その支援は卒業生の社会的自立のプロセスとどのように関連するのか、という2点を描き出すことを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究では、高等専修学校(Y校)の事例研究という研究デザインを採用した。Y校では研究期間以前からフィールドワークを継続してきたが、本研究の目的に照らして、新たに、授業場面・進路指導場面・学校行事などの参与観察と、教師・卒業生へのインタビュー調査を実施した。

## 4. 研究成果

研究成果は主に以下の3点にまとめることができる。

### (1)不登校経験をもつ生徒の学校適応メカニズムの再分析

以前から継続してきたY校での参与観察とインタビューのデータをもとに、不登校経験をもつ生徒の登校継続のメカニズムについて再分析を行った。そして、彼ら/彼女らの登校継続を支える教育支援が卒業生の社会的自立のプロセスとどのような関係をもつのかについて検討した。

まず、不登校経験をもつ生徒たちのインタビューでの語り注目すると、不登校のきっかけとY校に通えている理由について、彼ら/彼女らの大多数が生徒間関係あるいは教師との関係といった学校内での対人関係に言及していた。次に、不登校経験をもつ生徒にとって友人や教師が「Y校に通えている理由」となるその背景として、過去の学校経験による「痛み」を共有する生徒集団、自閉症の生徒との共在、密着型教師=生徒関係による支援、教師による生徒間関係のコーディネートという、4つの要因/教育実践を示した。

ただし、不登校経験をもつ生徒の登校継続が主に対人関係によって支えられる一方で、卒業後の場における対人関係のあり方のギャップから、卒業生が早期離職・中退の危機に直面する場合があるという課題も描き出した。なお、この課題は、不登校経験をもつ

生徒だけでなく、Y校の対人関係に身を置き続ける他の生徒たちも直面しうる課題であった。

再分析の中で新たに明らかになったのは、自閉症の生徒とともに生活する学校の環境が、不登校経験をもつ生徒の登校を支えるサポート源となる、不登校経験をもつ生徒の進路展望を形成するきっかけとなる、という2つの意味で、生徒の社会的自立を支えていたということである。

成果は、雑誌への寄稿(『青少年問題』)と、国際会議(The 4th Congress of the International Society for Cultural and Activity Research)でのポスター発表という形で、公表を行った。

## (2)生徒の進路決定のメカニズム

研究期間以前に実施していた生徒へのインタビューに基づき、教師に対して進路指導に関するインタビューを新たに実施した。そのうえで、生徒の語りから浮かび上がる「出来事」と「志向性」(伊藤 2013)という2つの要素に着目しながら、Y校の生徒たちが進路を決定して卒業していくメカニズムについて検討した。

Y校の生徒たちの語りからは、学校内/学校外における出来事とそれに対する意味づけの連鎖のもとで「やりたいこと」が設定された様子が見出せた。そうしたなかで、まず出来事に注目すると、生徒たちの「やりたいこと」の発見に結びついた出来事は、非常に多岐にわたっていた。学校内の出来事については、進路指導に基づく非偶然の出来事に限らず、特別活動・部活動やそこでのリーダー体験、さらには教師・自閉症の生徒・先輩との交流といった出来事が、偶発的に生徒の進路展望の形成に影響を与えることがわかった。また、学校外の出来事については、過去の不登校にまつわる経験や、家族との関わりのなかで生じた出来事が、生徒の進路展望の形成過程に影響を与える様子も見出せた。

そうした出来事は、さまざまな意味づけがなされることで、生徒の「やりたいこと」の発見に結びついていった。その意味づけの根底にある意識を探っていくと、何らかの目標を達成したいと個人が思い描く願望(志向性)があると解釈できるものも多く見られた。具体的には、「『楽しいことを仕事に』志向」「サポート志向」「年長役割志向」「成長志向」という4つの志向性を、複数の生徒の語りから導き出すことができた。

これらの出来事と志向性に関する分析からは、さらに、Y校の生徒たちを進路決定へと水路づけるような教育実践・背景要因を見出すことができた。それらを大きく分けると、

特別活動や部活動、専門コースの授業、進路行事・職業体験の機会などを充実させることによる、学校内の多彩な出来事の創出、「やりたいことがある/やりたいことを探

している」フリーターに出会うような学校外の出来事(アルバイト、学校外の仲間集団との交流)の制御、という2点に整理できる。

上記の教育実践・背景要因や、生徒のサポート志向を培いうるケアリングの連鎖の教育実践などをふまえると、Y校の生徒たちは、フリーター・無業に結びつかない形で「やりたいこと」を発見し、「やりたいこと」と進路決定を両立できるような環境に置かれていると考えることができる。また、そうした環境の中で、生徒たちは「やりたいこと」を見出せなかったとしても、進路決定を自明視するようになっていくと推察できる。

ただし、こうした生徒たちの進路決定のメカニズムを考えるうえで、留意すべき点が2点判明した。1点目は、生徒たちのなかには、家庭の経済的事情、学力、高卒求人職種の偏り、本人の「適性」をふまえた教師の指導などによって、大きな制約を受けながら進路展望を描いていく必要がある者がいるということである。2点目は、Y校で形成した進路展望は、卒業後に会う学校外の出来事のもとで大きく揺らぐ可能性があるということである。このことから、生徒の社会的自立を支えるためには、学校卒業後の進路展望形成の支援を継続する必要があるということがしさされた。

成果は、学会発表(日本教育社会学会第65回大会)を行った後、学会誌(『子ども社会研究』)に投稿を行い、採択・掲載された。

## (3)卒業生の就業・就学継続のメカニズムと早期離職者・中退者の困難

新たに実施した卒業生へのインタビューをもとに、近年のY校の卒業生たちがなぜ就業・就学を継続できているのかについて、そのメカニズムを卒業生たちの語りから探索した。それと同時に、Y校の教育実践が卒業生の就業・就学継続を支えるうえでの限界と、教師が直面しうるジレンマについて検討した。

卒業生へのインタビューでは、5名から、卒業後の就職先・進学先を離職・中退することを考えたという経験が語られた。離職・中退の危機を乗り越えた経験をもつ卒業生たちの語りからは、彼ら/彼女らの就業・就学継続を支えたと考えられる事柄が複数あり、Y校の教育実践とは直接の関連がみられないものも多いということがわかった。しかし同時に、Y校の教育実践に関連する事柄として、Y校での教師の話の内容や教師・友人とのつながりが、卒業生の就業・就学継続を促すような「想起される学校経験」となりうることを見出せた。

そして、それらの「想起される学校経験」によって就業・就学継続が促される背景として、在学中の「辞めないための指導」と、つながり続ける教師=卒業生関係という2つの教育実践があることを指摘した。これら

の教育実践は、Y校と卒業後の就業・就学の場との対人関係上のギャップが原因となっていた、かつてのY校の早期離職・中退のメカニズムを克服すると考えられるものであった。

しかし離職・中退の原因の中には、本人の意識のモチヨウのみでは解決できないものや、在学中には予期しえないものもあり、「想起される学校経験」を提供する教育実践では乗り越えがたい就業・就学継続の困難が少なからずあることがわかった。また、卒業生や教師の語りからは、就職先・進学先への定着を促す「辞めないための指導」が同時に離職・中退した者の社会的自立への困難につながる「想起される学校経験」にもなりうるという、指導上のジレンマも見出された。

成果は、学会発表(日本教育社会学会第66回大会)という形で公表した。学会誌への投稿も行ったが、不採択となったため、現在再投稿に向けた準備を行っている。

なお、(1)~(3)の成果は、2014年11月に東京大学大学院教育学研究科に提出した博士学位論文の一部となった。博士号は2015年3月に授与された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

伊藤秀樹, 2015, 「“非主流”の後期中等教育機関を概観する——生徒層・カリキュラム・進路」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第54巻, pp. 551-563, 査読無.

伊藤秀樹, 2014, 「高等専修学校における進路決定——進路展望を形成する『出来事』の分析より」『子ども社会研究』20号, pp. 61-74, 査読有.

伊藤秀樹, 2014, 「不登校の子どもとオルタナティブな学校——登校を支える人間関係」『青少年問題』第654号, pp. 34-41, 査読無.

[学会発表](計4件)

Hideki Ito, 2014.10, Educational Safety Net for the Long-term Absent Students in Japan, The 4th Congress of the International Society for Cultural and Activity Research, ANZ Stadium, Sydney.

伊藤秀樹, 2014.9, 高等専修学校における自立支援のジレンマ——「想起される学校経験」がもつ両義的な意味, 日本教育社会学会第66回大会, 愛媛大学・松山大学.

伊藤秀樹, 2014.3, 「実証主義」的フィールドワーカーの憂鬱——表象の危機とどう向き合うか, 関東社会学会 2013年度第2

回研究例会「自己/語り/物語の社会学・再考」, 一橋大学.

伊藤秀樹, 2013.9, 「計画された偶然」による進路選択——高等専修学校を事例に, 日本教育社会学会第65回大会, 埼玉大学.

[その他]

#### 【アウトリーチ活動(講演)】

伊藤秀樹, 2013.12, 不登校とスクールカースト, 平成25年度子ども・若者を理解するための講演会, 神奈川県立青少年センター.

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

伊藤 秀樹 (ITO, Hideki)  
東京大学・大学院教育学研究科・助教  
研究者番号: 80712075

以上